

令和4年度福生市総合教育会議 議事録

日 時：令和4年12月19日（月）午後1時30分

場 所：福生市役所第二棟4階委員会室

- 1 開催日時等 令和4年12月19日（月）午後1時30分から午後3時10分まで
- 2 会場 市役所第二棟4階 第1、2委員会室
- 3 出席者 市長 加 藤 育 男
 教育長 石 田 周
 委員 坂 本 和 良
 委員 加 藤 孝 子
 委員 新 藤 美 知 子
 委員 野 口 哲 也
 企画財政部長 石 川 健 三
 総務部長 小 川 裕 司
 教育部長 町 田 高 司
 参事兼教育指導課長 勝 山 朗
 教育総務課長 中 島 薫
 教育部主幹 吉 本 一 也
 教育支援課長 大 楠 功 晃
 公共施設マネジメント課 推進グループ係長 相 羽 克 洋
 指導主事 古 川 裕 平
 指導主事 竹 内 秀 礼
 指導主事 田 畑 圭 洋
- 6 欠席者 委員 渡 辺 浩 行
- 7 講 師 東京女子体育大学・東京女子体育短期大学 教授 小 林 福太郎先生
- 8 事務局 教育部 教育総務課 教育総務係
- 9 傍 聴 人 7人
- 10 議 事 小中一貫教育について

本会議の結果は、別紙記載のとおりである。

市 長 加 藤 育 男

【教育総務課長】 それでは定刻となりましたので、これより令和4年度福生市総合教育会議を開催いたします。私は本日司会を務めさせていただきます教育総務課長の中島と申します。よろしく願いいたします。次第に従いまして進めさせていただきます。

次第2、市長挨拶。加藤市長よろしく願いいたします。

【加藤市長】 皆さんこんにちは。本日も福生市総合教育会議に御出席をいただきまして、誠にありがとうございます。そして教育委員の皆さま方には、日頃から福生市の教育行政に多大なる御貢献をいただいていますことを、心から感謝申し上げる次第でございます。

平成27年からこの総合教育会議が始まりまして、今回でちょうど10回目という区切りでございます。法律改正が始まる前ですけれども、少し前まで、なかなか私ども市長部局は教育行政のほうに意見が出せないという状況の中で、こういう形になったというので、私ども大変うれしく思っておりますし、教育委員の皆さま方と親しくこうやって議論をさせていただくこと、意見を交わしていただけること、すごく感謝しているところでございます。前は、初めて福生市内の小中学生を招きまして、児童・生徒にiPadというものを付与しておりますので、その状況を子どもたちの視点からお聞かせいただいたところでございまして、非常にこれも有意義だったかなと思っております。

GIGAスクール構想で、非常に子どもたちを取り巻く環境も変わってきているという状況でございますし、DXも大変推進しているなということを思っていますけれども、その中にはやはりコロナ禍という部分がございます。今、中学校なんか私、行かせていただくんですけども、中学生が1年生から3年生になった部分のこの3年間、全くマスクを外していない子どもたちがいるということで、今恥ずかしくてマスクを外せなくなっているというようなことも聞かせていただいて、かわいそうだなというふうな思いを強くさせていただいているところでございます。

そういう中で時代は大きく変化しておりますし、少子化の進行や、あるいは学校施設の老朽化等、喫緊の課題も私どもは突き付けられているわけでございます。そういう中で、今回テーマとさせていただきました「小中一貫教育」、今回小林福太郎先生に東京女子体育大学から来ていただいて、この問題に関してはオーソリティーだというふうに伺っておりますので、非常に楽しみにしておりました。私もずい分前になりますけれども、平成17年の市議会議員の時代に小中一貫教育というものを一般質問で取り上げさせていただいたことがございます。それから17年ぐらいたっているんですか、そういう中でどうやって、この頃皆さん方はこういうものを認識しているのか、またどういうふうに進められているのかということも、改めて私ども確認させていただこうというふうな思いでございますので、何卒よろしく願いいたします。ぜひ今日は有意義な会議を持ちたいと思っておりますので、御協力のほどよろしく願いいたします。ありがとうございました。

【教育総務課長】 ありがとうございます。次に次第の3、石田教育長から御挨拶をお願いいたします。

【教育長】 改めまして、教育長 石田でございます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

加藤市長をはじめ市長部局の各部の皆さまには、日頃から福生市教育委員会のさまざまな施策の推進に当たりまして御協力いただきまして、本当にありがとうございました。厚い御支援に応えようと私どもも頑張っているところですが、今、加藤市長から御紹介があったとおり、1人1台iPadの端末が子どもたちに行き渡ったことで、学校の授業改善は本当に劇的に進んでいると思っております。

そういった中で今日は、福生市総合教育会議の会議規則第5条に基づきまして、小中一貫教育について、東京女子体育大学教授の小林福太郎先生に御講演をいただきたいと思っております。私から小林福太郎先生の御経歴を申し上げます。

先生は品川区等で中学校の教員をお務めになられました後、葛飾区教育委員会指導主事、教育庁指導部指導企画課指導主事、同教育庁指導部の主任指導主事人権教育担当として御活躍された後、中野区教育委員会指導室長を歴任され、平成18年度、品川区立小中一貫校伊藤学園の初代校長先生として御着任されました。施設一体型の小中一貫校の実践を通じて、義務教育9年間で一貫した学びをどのように進めていったらいいか、その在り方について全国に発信されてきた先生でいらっしゃいます。御専門は道德教育でございます。

加藤市長とともに教育委員会としてもお話を拝聴して、小中一貫教育について共通認識を持って、今後の施策推進に生かしてまいりたいと存じます。本日はどうぞよろしくお願い申し上げます。以上でございます。

【教育総務課長】 ありがとうございます。それでは議題に入る前に、本日御出席の皆さまの御紹介をさせていただきます。

本日御講演をいただきます、東京女子体育大学教授 小林福太郎先生でございます。

【小林教授】 よろしくお願ひいたします。

【教育総務課長】 次に教育委員の皆さまを御紹介させていただきます。教育長職務代理者坂本教育委員でございます。

【坂本委員】 よろしくお願ひします。

【教育総務課長】 加藤教育委員でございます。

【加藤委員】 よろしくお願ひいたします。

【教育総務課長】 野口教育委員でございます。

【野口委員】 よろしくお願ひします。

【教育総務課長】 新藤教育委員でございます。

【新藤委員】 よろしく願いいたします。

【教育総務課長】 次に市の職員でございます。企画財政部長 石川でございます。

【企画財政部長】 石川でございます。よろしく願いします。

【教育総務課長】 総務部長 小川でございます。

【総務部長】 小川でございます。どうぞよろしく願いします。

【教育総務課長】 教育部長 町田でございます。

【教育部長】 よろしく願いします。

【教育総務課長】 教育部参事 勝山でございます。

【教育部参事】 勝山でございます。よろしく願いいたします。

【教育総務課長】 それではこれより次第の4、議題に入ります。加藤市長、議事の進行をお願いいたします。

【加藤市長】 分かりました。それではここからは私のほうから進行をさせていただきます。

次第4、議題は「小中一貫教育について」でございます。はじめに「令和における福生市立学校の在り方検討委員会について」でございます。教育委員会では令和4年度から本検討委員会を立ち上げておりますが、会議の進捗等はどのような状況でございましょうか。勝山教育部参事から説明を願います。

【教育部参事】 失礼いたします。教育部参事 勝山でございます。私からは、令和における福生市立学校の在り方検討委員会について、御説明をさせていただきます。

本日はプレゼンの資料に加えまして、市長、教育委員の皆さまには、こちらの補足資料ということで冊子をお配りさせていただいてるかと思っております。説明の中ではこちらの内容には触れませんが、後ほど気になる点等は、こちらの資料で御確認をいただければと考えております。どうぞよろしく願いいたします。

本検討委員会を令和4年度から新たに開催するに当たりまして、その目的や所掌事項、組織等について定める必要がございましたことから、本検討委員会の設置要綱を作成いたしました。設置要綱につきましては、本日の補足資料の1ページにも入れさせていただいておりますが、

令和4年3月の庁議、例規審議会にかけまして、令和4年第3回教育委員会定例会にて議決をいただき、本検討委員会を無事スタートすることができました。

さて、本日は画面のほうにございます3本の柱で御説明をさせていただきます。まず1本目の柱、本検討委員会の概要についてでございます。福生市の小中学校が直面している教育課題を解決すること、そして学校教育に対する市民の思いや願いを実現すること、これらを踏まえた、今後の福生市立学校の在り方等を検討していくことを目的に設置をいたしました。所掌事項につきましては主に4点、加えて、その他教育委員会が必要と認める事項としてございます。基本的にはこちら4本の柱が軸となりますが、今年度令和4年度の5回の会議につきましては、小中一貫校の検討ということで進めてさせていただいております。

次に2本目の柱になります。これまでの検討委員会の経緯についてでございます。全5回の日程と内容は、予定も含めてとなりますが御覧のとおりでございます。これまで福生市立学校の現状や、小中一貫校の法令上の位置付け等を事務局から御説明をいたし、委員の皆さまからそれぞれのお考えについて御意見をいただいているところでございます。また、その会議のその場で御発言できなかった内容や、他の委員の意見を受け、さまざまお考えが膨らむこともあると考えまして、会議の事後に課題を出ささせていただき、改めて御意見をいただき、その御意見を次回の会議で改めて共有する形で進めてまいりました。この事後課題等でいただいた御意見につきましても、本日の参考資料の冊子の中に混ぜ込ませていただいております。

第1回では福生市立学校の現状について、御覧の4つの項目、小学校を核とした公共施設の再配置から福生市の教育課題までの4つの課題について、こちらから御説明をさせていただきました。

まず1本目の柱、小学校を核とした公共施設の再配置についてですが、詳細は人口減少と学校施設の老朽化について。町会をベースとした学区割。ここでは中学校の通学区域が、各小学校区域の集合体となっている特徴に触れつつ、本八第一地区、長沢地区の南側、この児童は在籍校ではない学校の近くを通過して在籍校に通う、そして本七地区の東福生駅の北側、そして福東地区の東側の児童生徒は在籍校までの距離が遠いという課題について、御説明をいたしました。

次にコミュニティ・スクール。ここでは多くのメリットが生まれているという一方で、御協力いただける地域の方々が重複し、一部の地域の方に負担が多くかかっている、こういった課題を御説明したところでございます。

福生市の教育課題につきましては2点、学力の向上と、支援が必要な児童生徒への対応について御説明をいたしました。

第2回では、福生市立学校への期待や願い、実現したい学校の姿について、全ての委員の皆さまから御意見をいただき、その後小中一貫校の法令上の位置付けや、施設形態による分類、先行実践地区における成果や課題について御説明をいたしました。

法令上の位置付けといたしましては、小中一貫型小中学校と義務教育学校の違い、それに伴う組織等の違いについて御説明をさせていただきました。施設形態につきましては、施設一体型、隣接型、分離型、この違いや、全国の小中一貫校の施設形態、今表で出させていただいておりますが、こちらについての御説明をさせていただきました。

先行実践地区における成果や課題といたしましては、回答した自治体の99%が大きな成果、あるいは成果が認められると回答していることと、その具体的な成果の内容について、また回答した自治体の半数以上で、実践する中での課題が認められると回答していることと、その具体的な課題の内容について御説明をいたしました。こちらの具体的な内容につきましても、補足資料の中に説明をしたプレゼンテーションのものが入れていますので、後ほど御覧いただければと思います。

最後に3本目の柱、検討委員会委員からの意見でございます。小中一貫校の必要性や期待といたしましては、異年齢集団で得られる相乗効果や学習支援の機会の確保、幼稚園や保育園と小中一貫校、さらには社会教育施設を含めた、地域社会の拠点として検討していけるとよいの御意見をいただいております。一方、不安や課題といたしましては、人間関係や進路選択に関すること、保護者、地域の理解に関すること、法令上の位置付けや施設形態に関すること、さらには教職員の負担増加等についての意見が挙げられてございます。

明後日、第4回の会議を迎えますが、5回の会議を経て、小中一貫校を導入していく場合にはこういったことを考えていかなければいけないのではないかと、こういった検討を進めていかなければならないのではないかとという方向性、提言のようなものをまとめていきたいと考えているところでございます。私からは以上でございます。

【加藤市長】 ありがとうございます。勝山参事のほうから、現在の検討委員会での会議の進捗状況の説明がございました。市内小中学校の校長先生や、本日も傍聴に見えられておりますけれどもコミュニティ・スクール委員会の会長さん、あるいは町会長さん方にお集まりをいただき、特に小中一貫校の導入をテーマに議論を進めていただいていることがよく分かりました。しかしながら、まだまだいろいろ検討事項があるようでございます。ぜひ今後も十分に議論いただくことを期待いたしているところでございます。よろしく願いいたします。

それでは次に、講演に入らせていただきます。東京女子体育大学教授 小林福太郎先生に御講演をいただきたいと存じます。タイトルは「これからの時代に求められる学校の在り方～小中一貫教育の視点から～」でございます。先ほど石田教育長から御紹介がございましたが、品川区の一体型小中一貫校時代に校長先生として御活躍されたと伺っておりますので、小中一貫教育とはどのようなものなのか、どのような効果があるのかなど、御経験からのお話も楽しみにしているところでございます。それでは小林教授、よろしく願いいたします。

【小林教授】 それでは改めまして、皆さんこんにちは。東京女子体育大学の小林と申します。本日はよろしく願いいたします。

私が本市から御依頼をいただいた時にいただいたお題は、「これからの時代に求められる学校の在り方」ということでございました。それで私自身、それでは「小中一貫教育の推進の視点から」という副題を付けさせていただいたところでございます。そして今日これからお話しする主な内容としては、私の気持ちは、観念の罫からの脱却を果たして、子どもたちのために学校教育の質的な向上を実現するというところで、お話を進めさせていただきたいと思っております。できる限り時間の中で進めたいと思っておりますので、多少説明が速くて分かりづらいところがある

かもしれませんが、後ほど御質問等をお受けしたいと思いますので、よろしくお話ししたいと思います。

さて、今日ここでお話しするのに大きく3つの柱を立ててまいりました。1つは小中一貫教育の導入の背景や期待、そして2番目は教育的な効果、そして3点目は、こうした変革を通して一体何が得られるのか、どういうものがもたらされるのか、こういったところを中心にお話を進めたいと思います。

ちょっとプロローグなんですけれども、ここで時間を費やすときりがなくなるんですけれども、お手元にもハンドアウトしたものがありますので、4つのイラストがあると思います。1つは昇降口です。学校ならではの昇降口であります。そして2点目、これ実はもう10年以上前になりますが、私が校長をやっていた学校の児童生徒であります。知らない人はこれを見ると、どこかの私立の学校だと思ってしまうかもしれませんが、これはれっきとした公立の小学校でございます。通知書が何で出てくるのか。そして、これは大変新しい、いい施設を作っていただきましたので屋内プールです。今でも東京都内はごく少ないんですけども、屋内プールを有している学校があります。そこでの指導の様子なんです。なぜこういう画像をお示したか。これは最後にお話を通して、もう1度詳しくお話しをしたいと思うんです。この辺の上履きは必要なのか、制服は本当に高いんですかとか、働き方改革がいわれている中で、学期ごとに通知書って本当に必要なんですかとか。そして、これ実は冬なんですけれども、こんなようなことを最後にもう1度お話しをしたいと思っております。

さて、実は私自身は、先ほどちょっと御紹介いただいたように、今からうん十年以上前ですけども、教員生活を公立の中学校の教員としてスタートいたしました。14年ほど中学校の教員をやりましたが、最初は昭和50年代、とにかく校内暴力が大変激しい時代です。私もいつまでもつのかなと自分で不安になりながら、毎日格闘した記憶がよみがえってまいります。

その時に私よりも年齢が5つ、6つ年上の先輩の先生がいました。私から見ると、この先輩はスーパースターのような存在でした。もう30前後ですけども、数学の教科書にはこの先生も執筆者として名前が入っていたりとか、それだけじゃありません、とにかく校内ではしっかりと仕事をされて、生活指導もばっちりとやられる先生です。何を聞いても全部答えが返ってくる。その先生の言うとおりにやるとうまく行くのかなぐらいに、私は大変尊敬していた先生です。

この先生が、ある日三者面談をやってお互いに職員室に戻ってきた時に、珍しく弱音を吐いているんです。何かというと、「どうも三者面談うまく行かないな」、そんな弱音の姿を見たのは初めてでした。それは何かというと、担任としていろいろ資料は持っているんだけど、しかし、じゃ数学の指導はこれをやればいいのか、あれをやればいいのか。でも国語苦手だね、数学苦手だね。果たしてどれだけのアドバイスができていいのか。この先生は何でそんなふうに思ったかということ、ちょうどお子さんが小さくて、熱出して、本当に不安でしょうがない。ところがその日は日曜日でしたと。どうしようかっていうことで、大変親として心配な中で、当時昭和50年代、ようやく医師会が始動して休日診療所というのができまして、そこへ連れて行ったら若い女医者が出てきて、とにかく的確に診断をしていただいて、そして自然治癒力のなせる業なんですか、とにかく快方に向かった。親としても非常に安心をした。それに対

して同じ専門職でありながら、私はどれだけこの親や生徒の期待に応えられているのか。もちろん教育の世界と医学の世界は違いますけれども、私どもも仕事ながらにも、ちょっと2～3年たつと薬変わったとか、検査の方法が早くなったな。人の命を預かる医学界、常に新しいものを取り入れながら適切な診療をしていただいている。学校もいろいろ頑張っていますよ。こういったICT機器も進んだりしていますけども、果たして本質的なところで授業がどれだけ変わっているのか、システムがどれだけ変わっているのか。言うなれば、あなたはもし30年前の治療法を望みますかと言われたら、そんな人は誰一人いないと思うんです。じゃ学校は、果たして30年前とどこがどう変わっているか。外見では変わっているけれども、中はどれだけ変わっているのか。少しそういったことも考えていく必要があるのではないかなど。

教育は常に改革の連続だといわれているんですが、私は押さえなきゃいけないものとして1つ、昭和59年からちょうど60年前後の臨時教育審議会、これはやっぱり押さえておく必要があると思うんです。それまで、皆さん御案内のとおり教育施策というのは中央教育審議会、中教審が常に機能しているんですが、当時の中曽根総理大臣は、その教育施策をこれから新しく積み上げていくに当たって、中教審ではなく臨時の審議会を持った。このポイントは、あまり教育関係者を入れなかったんです。もちろん教育界は入っていましたよ。あえていろんな人の意見を聞く。これからの学校、これからの教育はどうすべきかということを、ここで諮問したということだと思っんです。

ここでやはり押さえなきゃいけないのが、1つは個性重視の原則。特に学校においては画一化、硬直化、閉鎖性を打破していく必要があると。特にこの閉鎖性、硬直性、画一性、それから自己完結的な考えからの脱却。これは生涯学習への移行です。今は生涯学習って当たり前に使っていますけども、生涯学習という言葉が使われ出したのは臨教審の頃からだと思います。特に自己完結型の考え方の脱却というのは、学校もそうだし、子どもの立場からも考えなきゃいけないということだと思っんです。一生涯の中で、学校教育がどういう意味があるかということを考えていく必要がある。

少し時間の関係で飛びますけども、平成17年に、これは中教審ですけども新しい時代の義務教育を創造する。義務教育です。この一節にこんなものがあります。「今こそ義務教育の構造改革を図る必要がある。市区町村と学校の主体性と創意工夫により、それぞれの地域において最適な状態を実現する必要がある」んだと。言うなれば福生市として、福生の実態を踏まえて、そして最適な状態を作る必要があるんだと。これが平成17年の中教審の答申の中にあります。まさにこれは新たな学校観を築いていく、1つの指標になっているんじゃないかなと思います。

私はただ、この中で大事にしたいのは、子どもにとってどうなのかということだと思っんです。学校教育は特に子どもたちの人格の完成を目指して、さまざまな支援、指導を積み重ねていくわけですので、そういう点で、子どもにとってどうかということを考えていく必要があるということだと思っんです。

さて、日本の義務教育制度をちょっと簡単に。ここにいる方々にはもう釈迦に説法だと思っんですけども、小学校6年間、中学校3年間、この9年間は、言うなれば、ここに示したとおり年齢主義、履修主義による進級制度というのは、中学校や高校は修得主義ですから単位を取

らないと卒業できません。しかし義務教育に関しては、とにかく教育を受ける権利というのをしっかりと守るためにも、年齢によってどんどん進級していくというシステムを取りながら、昭和22年、1947年以降、言ってみれば、継続して単線型のシステムが取られていたんです。それしかなかったんです。

これに対して、平成28年によく学校教育法第1条が改正されまして、この単線型に終止符を打ったんです。すなわち、義務教育学校を新たに設置してもいいということになったんです。実は平成10年には中等教育学校が、学校教育法を改正して認められていたわけなんですけども、義務教育に関してはここで初めてメスが入った。すなわちこれを考えてみると、ここに義務教育学校が仲間入りしたわけですけども、これ69年間全然変わってなかった。約70年間です。これを考えた時に、この69年間の時代の流れと子どもの実態はどうなんだろうかと、そのようなところから、導入の背景と期待というものを少し考えてみる必要があるんじゃないか。

まず最初に1番目は、兄弟姉妹の数。これ国民生活白書なんですけど、これは実は30年間の隔たり、昭和37年、1962年、東京オリンピックが開かれる2年前の話です。そこから平成4年、30年たって、この昭和37年は兄弟の数4人以上が62.2%。これは言うまでもなく少子化の流れです。このように変わってきているわけです。さらに児童環境調査。これは前の厚生省というか、現在の厚生労働省が経年的に測っている子どもたちの実態調査。これは5年スパンで見ただけでも、遊ぶ友人の数が減ってきている。そのうち全体の数も減っているし、要するに仲間遊ぶという、いわゆる子どもたちのコミュニティ自体が、ゲームなどの普及によって変わってきている。

これは、学年別のいじめの件数をここに挙げました。いじめというと、認知件数がどうこうと言うんですけども、実は私は以前から発生の学年に着目しています。これ実はあえて平成26年なんです。どうしてかと言いますと、平成25年にいじめ防止対策推進法が施行されまして、そこらからいじめの認知の仕方がちょっと変わったんです。すなわち御案内のとおり法令上のいじめ、これはいわゆる社会通念上のいじめと違まして、ちょっとしたトラブルなども、その子が嫌だと思ったらいじめだよと。したがって今は、実は小学校2年、3年が多いんです。小学生ってそういうトラブル多いんで。ただ文科省としては、その頃から、人が嫌がることはやっちゃいけないんだよってちゃんと指導しましょうねと、そういうようなスタンスに変わってきた。だから今は、認知が多いから駄目じゃなくて、認知して、解消・解決に向けて頑張りなさいと。したがって、こういう数値が見えないんですけども、26年までは、私が言いたいのは小6と中1の間にギャップがあるわけです。すなわち中1になっていじめが増えるんです。ガクンと増えていくんです。これは社会通念上のいじめ、いわゆるわれわれが一般的に考えているいじめの数です。あえて人の嫌がることをする、あえて人をいじめるという。そしてこのいじめの数は、中1から、今度はおそらく発達段階によるもの、そして中学校の先生方の指導の1つの力もあるんでしょう、こうやって下がっていきます。

一方で、これは十分皆さん御案内のとおり不登校。これは直近の数を載せてございます。

「令和3年問題行動調査」からということで見ると、これが一番の直近の数ですけども、この間明らかにいわゆる中1ギャップが鮮明になってます。すなわち小学校から中学校に移行すると、ガクンとそれがカウントとして増えてしまう。そしていじめとは違って、その後不登校

は2年、3年とどんどん上がっていくという、そういう流れがあります。こうやってお話しするとだんだん、そうか、中1に1つのポイントがある、すなわち、その接続部分に何かあるんじゃないかっていう、1つの考え方が浮上してくるわけです。

これは広島県呉市で、これは小中一貫教育を全市展開しているところですが、そこでの研究発表の時の数値なんです。これ身長伸びの比較とって、要するに子どもたちの平均身長をグラフにしてみると、ここで男子のほうがはっきりしているんですけども、すなわちこの黒い線のほうは2003年、そして青い線が1950年。この約半世紀間の隔たりで身長伸び率は、御覧のとおり1950年代は14～15歳がピークだったものが、今は11歳、12歳ぐらいがピークになっている。すなわち身長伸びがこんなに変わっています。69年間の隔たりの中で子どもたちにはいろんな変化があった。ただ、これはあくまでも身長のもので、内面、心の育ちの部分というのはなかなか測れませんので、全てを言うことはできませんが、1つの指標であるというふうにお考えいただければと思います。女子も男子ほどではありませんが、やはり成長は早まっている。そこでよく、以前に比べると小学校は5年、6年でいろいろ生活指導上の問題が多くなって、そしてそこで学級崩壊が起きるとか、こういったものも結び付けて考えることはできるかもしれません。

さて、これは学習の悩みのグラフです。やや古いんですが、2004年にベネッセという教育研究所、出版社ですけども、ここがやった研究で、すなわち学習への悩み、今までもっときちんと勉強してればよかったとか、上手な勉強の仕方が分からないとか。これ見ると、5年生と6年生のこの境が一番勾配がきついわけです。すなわち小学校から中1になると勉強へのプレッシャーというのがすごく高まる。言ってみれば学級担任制から教科担任制になるとか、内容も明らかに違ってきます。そういう点で、実態としてこんなものがある。私は中3と高1も注目しなきゃいけないなど。すなわち義務教育が終わった段階と高校1年生。でもここでは、学習への悩みに関してはあまり変化はないんです。

これ少々古いんですが、ベネッセは10年ぐらいのスパんで、これが2004年ですか、10年後のものを見ると、これベネッセの10年後の結果なんですけど、やっぱり同じです。大体緑色系のここで言うとこの部分、学習の悩み、やる気が起きないとか計画どおり進まないというのは、やはり中1になるとガクンと上がってしまうということです。

さらにこの学習の悩みのもう1つグラフを見ると、学習の好き嫌いという点でもこのように。これは10年後の2014年です。ベネッセはおそらく間もなく来年あたり、また経年的にこの結果が出てくると思いますけれども、やはりこの部分で見ると、勉強の好き嫌い、はっきり言うと勉強に対しての意欲的な捉え方が、残念ながら中学になると下がってしまっているという実態が、全国的な中で見られるということだと思えます。

生徒指導に見られるギャップ。これは画面を見ながらちょっとイメージしていただきたいんですけども、小学生にこうやると、大体小学生って私服を着ている。本市も多分そうだと思うんです。中学生は制服を着ているんでしょうか。標準服という言い方をしているかもしれませんが、こんな感じだと思うんですが。例えば、この髪飾りをつけている。私は実は一貫校の校長をやっている時にしみじみ感じたんですけど、この小学生に髪飾りつけると、私服ですからあんまり違和感ないんです。あ、かわいいねっていう感じです。ところが、やはりこうした標

準服、制服だと、これはいかがなものかなと。そうすると、例えば6年生の3月に担任の先生から「これかわいいねー」なんて言われていたのが、翌月に中学校へ行くと、「何つけてんだ」って全然違う対応をされてしまう。昔は、「中学生になるんだからちゃんとやりなさいね」とか言われ続けたり、そういうものを承知の上で、そしてさまざまな困難だとかそういうものを経験しながら中学生になるんですが、今の子どもたちは少子化で、そういう場面も非常に脆弱になっている。そういう中で、例えばあまりにも落差、戸惑いで不適應を起こしてしまう子が多いのかもしれませんが。これは私が一面で捉えた見方です。

しかしいずれにしても、やっぱり求められる円滑な接続。先生や学校は違いますよ。でも子どもから見たら、子どもは1つの人格で同じに上がっていくわけです。そうした時に、この落差をどうやって埋めていくのかということだと思えます。それを制度だとか、今までの流れでこうしていたからというものじゃないと思えます。

これはネット上にあるものなので、こういうところで御紹介してもよろしいかと思えますが、中教審の中で平成23年に「学校段階間の連携接続等に関する作業部会」というのがあります。その中にこういう資料があるんです。実はこれは品川区の職員がレクチャーをしているその画面なんですけども、1つは小中学校の自己完結型の教育の弊害。これはまさに臨教審が1980年代に言った、自己完結型の教育がいまだに続いているんじゃないですかと。これは私というよりも、この時のレクチャーでこういうふうに書かれたんです。「小学校は楽しい学校生活に終始しがちな」、ちょっと一方的な言い方かもしれませんが、どっちかというところ「楽しいね」、それを大事にしようと。でも中学校ってやっぱり義務教育の最終段階ですから、出口の指導をちゃんとしなきゃいけませんから、そういう点では、進路を最優先にしながらという部分があると。受験を最優先すると。要するに何かと言うと、学校としてはそこでおしまい。でもその子は先々続いていくんですよという意識が、どうしても少ないんじゃないんですかと。

さらに、「子どもの成長の連続性が重視されない」と。これ「独善的な相互不信と不干渉」ってちょっと変な言葉です。これを分かりやすく言うと、小学校の先生からすると、「あんなにかわいい子だった者が、中学生になったら何かいろいろ悪いことしている。中学校の先生、指導ちゃんとやっていただいているのかな」。中学校から見ると「この子、学習面基礎なっていない。小学校の時もうちょっとしっかり指導していただければありがたいのにな」。お互いに中学校の先生に対して、または中学校の先生は小学校の先生に対してそういう気持ちがあるんです。だけど不信感はあるんだけど、小と中は違うからねと、したがってそこで不干渉。あまりお互いにそこを真剣に、子どもたちのためにどうしていくかっていうことはできないんじゃないか。これ言うなれば、変な言い方ですけど製造責任みたいなもので、しっかりと一貫して1つの中でやっていけば、みんなですっかり面倒見ていくっていう意識になっていくと思えます。

それから、まさに校種間で責任転嫁できる構造。解決のために自ら動こうとしない。「まあ、いいよね。中学校は中学校でやるしかないよね」。小学校は小学校でやっているんですよ。だけど子どもは連続しているわけです。

そういう状況の中で、やはりこれを1つにしていくのを考え方ではないですか。よく小中の文化の違いっていいいます。文化って言うところちょっとおこがましい言い方かもしれませんが、

言ってみればやり方の違いです。でも、それはもう許される時代じゃなくて、まさに臨教審が言った、学校教育の硬直性がいまだに尾を引いています。ですからもうちょっと柔軟な制度。

私が今日こうやって小中一貫教育についてお話をしに来ましたけど、それがベストだとか、絶対これがいいよって意味じゃありません。いろいろなものがあっていいんじゃないですか。そのうちの1つとしてぜひお考えいただきたい。実は今までの小学校教育の良さっていっぱいあります。私は中学校の教員をやってきたので、本当にそう思っているんですが、中学校の良さ、中学校の文化の良さはあるわけです。だけどそのいいものはできるだけ残しながら、お互いに不完全な部分は補いながら。逆に言うと小学校の先生のいいところ、中学校の先生のいいところ、お互いにいいところ取りをして、それは子どもたちのためにです。そういう意識が必要なんじゃないですかということだと思っんです。

そこで、小中一貫教育の教育的な効果ということについて、次に入っていきたいと思います。私は幾つかあると思っんです。ここで6つ、効果の柱を出しました。1つは、端的に言うと学力向上するよと。次は、先ほど挙げた中1ギャップ。不登校の数増えちゃう、いじめの数増えちゃう。こういう部分も少し解消の手立てがあるんじゃないですかと。そして生徒指導に関しては、連続性があるから子どもも戸惑いなく、一貫した指導をしていますよと。それから異年齢集団の交流による教育。これは小学校関係の先生方からすれば、「いや、小学校やっていますよ。縦割り活動やっています」と。でもそれをもっとダイナミックにできるということですよ。今、ある区では幼保小中連携というのを考えてやっているわけです。要するにダイナミックにできるということですよ。そして最後は、特色ある教育の推進。特色を出すってということは、イコール学校の力を上げるということですよ。学校の力を上げるということは教育効果が高まって、子どもたちに還元できるということだと思っんです。

これ全部話していると大変な時間もかかりますので、私は今日は、特にこの4番と5番の部分を具体的に写真を通して、こんな感じでしたよということを皆さんに御報告させていただきたいと思っんです。

具体的にと言う前に、小中一貫教育ってというのは、先ほど勝山先生のレクチャーからもあっているようなタイプがあるわけです。私が経験したタイプというのは、私としてはやりやすかったんですけども、9年間で3つのスパンに分けてやっていました。1つは4年生まで、10歳です。よく小学校では2分の1成人式というのがあるんですけど、ここまです基礎基本の定着の段階。そして5、6、7というのは中1です。ここをつなげるのが1つのポイントなんです。これをつなげちゃうんです。ですから何かやっていると、先生たちに黙っているようなことを企画させると、みんなここで切っちゃうんです。でもここは切れないようにしているんです。これが、言ってみれば基礎基本の徹底です。そして最後の8、9が、いわゆる中学校的な、その子に合った進路を選んだりとか、能力を高める伸長。ですから低・中・高なんです。これ従来は小学校と中学校だったんですけども、ポイントとしては、もう中と小じゃない。私の時はまだ法改正が成っていませんでしたので小中一貫校と、今で言えば義務教育学校だよと。うちは小中一貫校だから小学校でもない、中学校でもない。だからこれは一貫して1つの学校だよと。

あえて区切るならばここですよ。冒頭にお見せした制服です。実は制服は私が着任した時

に、どっちかにしてほしいと言ったんです。それは何かと言うと、中学校は今まで制服、イコール標準服を着ていました。小学校は私服でした。でも1つの学校だからどっちかに揃えてほしい。全部制服にするのか、全部私服にするのか。何で中学校で標準服着て、何で小学校で私服着るんですかっていうことを、お考えいただいたことありますでしょうか。これ意外と原点に戻っていくとおかしな話なんです。実は私は、校長としては揃えてくれればどっちでもいいんだよと。別に根っからの制服論者じゃないですと。ただどっちって聞かれたら、私は制服のほうがいいんじゃないかなと答えると思いますけども。とにかく児童生徒にアンケート、保護者、PTAの役員、地域、全部に聞くとほとんどみんな、それは制服、イコール標準服がいいということなので、小学校の保護者に協力をお願いしたわけです。

その結果は後でお話ししますが、とにかくさっき言った4年生までは小学校的な扱い。だから標準服も男の子は半ズボンです。5年からは成長は早まっていますから、中学生的な扱いをする。例えば5年、6年の先生はできるだけ交換授業を中心として、教科担任制をつける。定期テストも、もう5年生からやる。実は大きな課題は、小学校の教育課程は1単位時間45分で、こっちは50分なんです。それをどうしていくかというのはいろんな工夫があります。実は私が着任したのは中学校に着任したんです。2年目に一貫としてスタートしたんです。もう行った時には検討が出されていて、これは大変だなと思ったんですけど、中学校も45分にしてコマ数を増やしていました。先生たちはそのほうがいいって言うんです。でも今は大体45と50でやって、昼休みとかどこかで調整してうまくできるように、いろんな調整の仕方があります。

とにかくこういう形でやりましたが、私はこれは都合が良かったのは、2年間の間にいろんな全国各地から、おそらく1,000件近くの訪問があったと思います。2校カウントなので校長2人、副校長2人なんですけども、この場合は小中一貫校の施設一体型でしたので、校長1人で3人の副校長がいました。そうするといろんなところから来た方は大体低学団と呼んだんですね、こちらの担当ですかって言うんですけど、そういうのは私はあえて作らなかったんです。何かと言うと、あなた方副校長は小籍、中籍はあるけども、今ここは一貫校の管理職なんだから、1から9までの学習指導の担当も副校長、1から9までの生徒指導の担当も副校長、全体を統括する総務的な役割の1人は副校長、こういうふうにしてくださいと。そういう仕掛けというか、1つの学校というのを強調しました。私は学力が高いとか何とかと、あんまり細かいことは言わないで、とにかく「小中」と呼んだ時は、「それは違う」と、そこだけは言ってムード作りをしながら、とにかく学校が1つになるように。そしていいとこ取りするようにということを心掛けて学校運営をしていきました。

その結果、異年齢集団。これが一番いろんな場面で異年齢集団の活動ができるんです。例えばここで言うと交流授業、授業を交流させます。給食の時も一緒に食べたりする。今はちょっと厳しいんですけど。それから移動教室。例えば5年生と8年生、旧中2を一緒に行かすんです。グループも混成で2泊3日過ごさせます。もちろん8年生の子たちは、翌年9年生は単独で修学旅行に行っています。両方味わえるんですけど。とにかく運動会も、私は頑として1から9まででやった。みんな先生たちは最初目を丸くしていましたけど。でも私にはちょっとした確信があったんです。というのは、私はたまたま、この母体となる中学校は最初のほうに赴任した学校だったんです。いわゆる里帰り人事ってやつです。私がいた時は学年9クラス、27

学級で、もう1,000人超える中学校でした。中学生が1,000人以上でこの校庭で運動会やったんだから、その時はまだ900人ぐらいでしたから十分できるよと。「1～2年生は午前中で帰してもいいんじゃない。3～4年になったらできるんだから。最後まで残るのは8年、9年でもいいよ」って言ったら、先生たちが、全部何とか工夫してやりましょう、それなら工夫してやりましょうと。とにかく先生たちがやる気で工夫です。なぜかと言うと、そこは改革なんです。要するに今までのものに引きずられないように、観念の罠に引きずられない。今までこうしていたからこうやらなきゃいけないっていうのは、役所の方は皆さん、何か新規事業を起こす時は1つ立ち上げたら1つなくす、ビルド・アンド・スクラップが原則でしょう。だけど学校ってビルド・アンド・ビルドなんですよ。いいと思ったらどんどん積み上げていっている。

それで働き方改革。私の働き方改革のポイントは教育課程の抜本的な見直しです。だからコロナだって、元に戻りましたって意気揚々と言っている方がいるけど、それ違うでしょうと。元に戻さなくてもいいじゃないですか。戻さなきゃいけないものもある。特に対人交流なんかは。でも、できちゃうものはできるんだから、それでいいじゃないですか。私の大学でも卒業式で延々と講演やったりして、2時間半ぐらいかかっていた。でもこのコロナで、20分でやったの。そしたらいつも口うるさい若い教員が、たまたま私の肩口で「いやー、やっぱり卒業式って20分でも感動するよな」。これですよ。結局何かと言うと、今までこれだけやったから、これやらなきゃいけないよねというようなものに束縛されちゃっている。これ呪縛があるってことですね。ということは、こういうものを通して新しい学校の在り方を見据えていかないと、社会の変化に追いついていけない。もう学校は見放されちゃうよ。だからこれからの学校をどういうふうに考えるのっていう時に、いろんな手法があるけども、1つの手法として、小と中をくっ付けて教員の意識を改革して、そして新しいものを作っていく必要があるんじゃないですか。ただし全部を壊す必要はない。いいものは続けましょうよ。まさに不易ということですよ。

実際にこうやってみると、交流授業って、これ国語なんです。これは9年生と3年生。これはしよっちゅうやっているわけじゃありません。もう本当にスポットです。だからそんなにいっぱい行っているわけじゃないです、正直。でもこのクラスが、国語に行くよって言うとどんな変化が起きるかと言うと、この子たちが、ちっちゃい子が得するんじゃなくて、こっちが勉強しだすんです、上が。教えるとなると勉強しなきゃいけないって、要するに上の子たち勉強しだすんです。これが中学校の先生の新たな発見です。「あ、こんな効果があるんですね」ってことです。

これは合同の社会科で、3年と7年、中1です。これは一緒に地域を回って、安全の確保も含めて一緒に授業をやっているという様子です。これも、こうやると非常に上の子たちはよく面倒見るんです。普段は目立たない子でも、活躍の場がこういう交流の中でいっぱい出てくる。これも正直言うと、しよっちゅうやっているわけじゃありません。本当にスポットだけです。

朝学習も同じです。これは移動教室のワンショットで、私が撮ったやつなんです。これは5年です、これ8年生。とにかく今までにない移動教室でした。夜なんかみんな入るでしょう。お互いに気遣うんですよ。上の子たちが悪いことしていると、先生注意するでしょう、すると下の子たちが神妙に聞いていたりとか。それから下の子たちの面倒を一生懸命見る。公立学校ですからいろんな子がいるんです。とにかく普段生徒指導で手焼いている子が、オリエンテ

ーリングで川渡る時に一生懸命おんぶしてあげたとか、荷物を持ってあげるとか、新たな発見がいっぱいあるんです。この子たちにとっては移動教室初めてですから、「どうだった」って聞くと、「先生、楽しかったー」って両方言うわけです。それは単独で行ったって楽しいですよ。でもこれで行っても楽しいんです。でも8年生は、翌年単独で修学旅行も味わえますということです。大体宿泊行事で異学年でやるなんていうのは、学校教育の中であまりない例なんです。でも分離型でも、さまざまそういうことをやってみたらいいと思うんです。

運動会はこんな雰囲気です。最初言われたのは、「先生、時間がありません」と。「そんな時間ないんですよ」「何で時間ないの。別にプログラム、学習指導要領に書いてあるわけじゃないよ。運動会ってやってもやらなくてもいいんだよ。だからプログラム見直しなよ」って言ったら、先生たちはいろいろ見直して、とにかく上の子たちがリレーで走ったら下の子たちが応援する。すごい盛り上がりでした。要するにお孫さんがいる高齢者の方にちょっと声聞くと、「いやー、校長先生、昔の運動会が返ってきたみたいだね」って言われました。ですから、こういうタイプのものがあるのもいいと思うんです。これだけが良いと言っているわけじゃない。こういうのもありですよということだと思っんです。

これは低学団。要するに4年生が低学団の一番トップなので、9年生が卒業する時に、「お兄さん、お姉さん、ありがとう。さようなら」ってやっているんです。そして中には9年生の男の子、泣きだす子もいるんです。そういうのを見ていると、こっちまで1つの大きなファミリーって感じで感動しました。

部活動は5年からOKです。御案内の方も多と思うんですけども、例えば今中学校で、吹奏楽コンテストはもう5年から出場OKにしています。最初は中学校の先生が嫌がりました。こういう言い方はちょっと不適切かもしれませんが、「邪魔だよ」みたいな。でもだんだん分かってくるんです。あるバレーボールの顧問の先生が、「先生、うちはOKですよ。早くからやったら強くなりますよ。私学にも流出しないで、いい選手取れますよ」と。そしたら、もうことごとくみんなやり始めた。1回その壁を突き破って。思い込んでいたんですよ、3学年だけでやるのが良いと思っていた。これは吹奏楽の様子ですけども、一生懸命5年生の子たちにこうやって教え合っている。ですから5年生からという感じです。

交流給食も、私がこれで学んだことは保育体験みたいなものです。結局上の子たちが下の子の面倒見ているんです。そこで学んでいるんです。この子たちが得するっていうわけじゃなくて、この子たちも面倒見てもらっていいんですけども、この子たちがいろんな企画をして、楽しい時間を持つということもありました。

全校朝礼。これは私がみんなに話しているんですけど、月1回しかやりませんでした。でも意外と話は通じます。あまり気にしないで、ただし短く、もう2～3分で終わる。だけど私が言いたいことは大体分かっている。1年生の先生が気利かせて「今日校長先生は何言いましたか」って言ったら、大体私が言いたいことを書いていました。こうやると、8年、9年になるともうこうです。下の子たちがいるから、そこでしっかりしなきゃいけない。お互いにいい感じですよ。ただ、翌週各学団で朝礼をやると、低学団に行くと、ほんわかした小学校のような朝礼がそこにある。両方味わえますということです。

職員室なんか全部一緒。要するに小と中の先生たちが情報交換がすぐできるように。人事

もできるだけ交流しました。免許制度の壁が若干あるんですけど。ただ、1つだけエピソードをお話しすると、どうにもならない8年生、中2の、とにかく先生たちが手を焼いて、困った生徒が1人いたんです。ところが小学校からずっと持ち上がりで中までずっと持ってもらった先生がいるんです。その先生の言うことは聞くんです。何でかと言うと、3年、4年で担任してもらって昔を知っている。そうすると中学校の先生たちは、自分たちは抑えられないけど、あの先生はこの子のことをちゃんと抑えられるという部分。それは本当に発見しました。いろんなことの実見がありました。水泳指導は後でまとめて話します。

最後に大事なことは、この変革によってどんなことがもたらされるか。まず子どもが変わるということです。子どもがより成長するんじゃないか。いわゆる安心感、これはかなり中1ギャップの解消にも効くと思います。そういう異学年交流があると、中学校は自己肯定感、自己有用感がかなり高まる。それから、とにかく教員が変わります。中学校のほうが専門性が高く、いい教科指導をするんですけど、逆でした。中学校の先生は、実際きめ細かないろんなことで小学校の指導を学んでいました。ただ中学校の先生の生徒指導だとか、全体で組織で動く力というのは、中学校の先生はやっぱり強いんです。ですから、それは小学校の先生は学んでいました。中学校の良さで小学校の良さというのは、私が予想していたのとはちょっと違って、そしてお互いにいいところを取ってうまくタッグを組んでいました。

それから学校が変わると言うのは、こういういろんなことで、ここに書いてあるようなこと。それから保護者も変わりました。PTAも一緒にしました。最初はみんな「えー」なんて言いましたけど、ちょっとやったら「先生、このほうがいいですよ」と。要するに「人数もある程度小P連、中P連にこだわっていたけども、でも先生、全然問題ないですよ」と。やるまではすごい抵抗されましたよ、それは。でもやってしまえば全然。運動会もそうですし何でもそうですけど、1回やると、大体もう定着します。観念の罫の呪縛から解かれるんでしょうかね。言ってみれば意識の改革、これが一番のポイントだと私は思っています。教員の意識改革、これが大きいと思います。

それにプラス、先生たちは指導力がつくし、学校力も上がるし、これが結果として教育の質保証に寄与するんじゃないか。質保証を高めていく。すなわち福生の教育をどういうふうにしていくかって、いろんな施策があると思うんですが、その中の1つとして考えてもいいものではないかなと。ただ地域性がありますから、私はそこら辺は、決して押し付けるとかそういうんじゃないかと、こういう方法も考えられるんじゃないですかということです。

こういうものが、いろいろと何で阻害されるのか。1つは固定観念がどうしてもある、こういう呪縛がある。もう1つは、どうしても当該学年に終始する。私は一番実は心を痛めていたのは、小学校の6年生の先生なんです。小学校って、やっぱり6年生の冠があるんです。そこが集大成。その冠はちょっと頂いちゃうんです。5、6、7とすれば。でも私はそこは心配したんですが、小学校籍のベテランの女性の先生が、開校して1年目の最後ぐらいですか、私のところに来て、「先生、遠慮しなくていいと思いますよ。この学校は最後は冠は9にあるんだから、だから6、7と」。例えば定期試験やるって言っても、親も教員もみんな心配するんですが、1回やるとみんな、「先生、このほうが勉強するからいいですよ」と、1回やってしまえばそんな感じです。先生たちは何かいろいろと気を遣うんです。ですから、その辺は考えよ

うや、やり方だと思います。

それから制度への依存。とにかく6・3制は当たり前だよねと、制度へ依存しちゃう。実態からかけ離れていると。制度の壁は、これはもう学校教育法改正されましたから、実際にもう制度は動きます。子どもにとって何がいいかっていうことを考えていく必要があるんじゃないかと思います。

もうそろそろ時間が来ていますので、とにかく私がこうやって、良いとこばかり言っているんですけども、後でもし御質問があれば、課題とか質問していただいていいと思うんですけども、私は8勝7敗でいいと思って学校経営していました。0か10か、0か100なんてあり得ない。だから一貫教育やったら8勝7敗だったら、やる価値あるなど、そういう気持ちでやりました。大相撲も8勝7敗続けてれば親方にもなれるし、一生そこで食っていけるんじゃないのと。要するに経営効率から言ってどっちがいいのって話で、負け越しがあっちゃいけないよねと。

とにかく日常的にやっていくっていうこと。私はそうは言うものの、何でも古い前のものを否定しているわけじゃない。いいところは引き継いでいく。引き継がなきゃいけないと思うんです。要するに目的と方法です。小中一貫教育やるためにやるんじゃないんです。子どもたちにとって何がいいかっていう方法として、小中一貫教育があるということが大事だと思うんです。そこら辺を見失っちゃうと、みんな疲れちゃうんです。何でこんなことやんなきゃいけないの、何で一貫校作んなきゃいけないのと。それは方法なんだよと。子どもたちの、これが目的なんだよと。目的と方法を峻別するっていうことだと思うんです。

これは皆さんどういうふうに捉えるでしょうか。これは典型的な例です。高学年、中学年には定期考査があるんです。低学年1から4は定期考査ないんです。そしたら、その間は校庭で遊ぶと、上で一生懸命定期考査やっているのに下で遊んでいる子がいると、雰囲気がちよっとおかしいねと。そしたら低学年の先生は、じゃこの間はせいぜい2日、3日ですから体育館で遊ばせますよ。そうすると否定的な先生はどうかと言うと、「外で遊ばなくてかわいそうだ」と来るんです。だから一貫校なんて駄目なんだと。でもそうじゃないでしょうと。来年になったら、君も上でテストなんだよと。大きい家族だったら、「今日はお兄ちゃん試験なんだから、あなたテレビ消して静かにしなさい」って、こうやって家でやるでしょ。今そういう場面がないわけです。そうすると絶好の教育の指導として有意義じゃないですかと、こういうのも、不便さを感じるのも。だからものの見方ですよ。そういう点でこれをどう捉えるかっていうのは、非常に私は大事なことだと思うんです。

最後に、ちょっと時間が来ていますが、私は意識改革どうでしたかね。土のグラウンドだったらそうじゃないかもしれませんが、今人工芝で、新しい校舎で、でも相変わらずこうなんですよね。皆さん今何履いていらっしゃるんですか。上履き履く施設って、今どこがありますか。学校ぐらいでしょう。だって、病院だって履かないですよ。何のために上履き履いているんですか。体育館履きは必要かもしれません。でも都内の学校でも、もう1足制30年やって何ら違和感もない。下駄箱なんて、大体下駄なんてないですよ、今ね。ここスペース空くじゃないですか。でもスペース空けるために1足制じゃないんです。意識を変えたんです。そういう柔軟な発想が、教育委員会の事務局の方も含めて学校の教員に。もう学校作ると、すぐ下駄

箱のスペース作っちゃうんです。そうじゃないでしょと。

要するに制服も、実はこれ話すと長くなるんですけども、2年目で100%になりました。安いんですよ。ランニングコストいいんですよ、制服のほうが。楽。今、毎日洗濯できる。子どもたち着たらメリハリがある。そして小学校の先生は何言いました。「先生、このほうが教育的効果あるじゃないですか」って言って、「あなたの服装は海水浴に行っているみたいだから、ちゃんとした服装して授業やりなさいね」って言いましたけどね。要するに、何で小学校は私服ですか、もう1回問い直してもいいと思うんです。何で中学校制服着ているんですか、もう1回問い直していいと思うんです。

これ買ったほうがよっぽど高いですよ。最近地区によっては、その時だけ5万も6万も出して1日のために羽織袴とか何か着て。それだけお金出せば1年間着られますよね。

通知表は、私は3学期制ですけれど2回にしました。その代わり面談をちゃんとやって、それでも十分、何の苦情もなく効率を上げました。

1年中私はこれを泳がせました。将来的に福生が、市民にも開放するためにもこういう施設を作ったならば、市民のためにも、子どもたち1年から4年までは隔週ですと泳がせました。5年、6年は水泳部。部活ですからガンガン泳がせました。そういう発想も成り立ちますよね。いろんなアイデアがそこに湧いてくるわけです。これ全部意識改革だということだと思うんです。

時間が来ていますが、私は何かと言うと、もたもたしていると国鉄と同じように潰れちゃいますよ、というふうに必要な研修会で言って歩いているんです。やっぱり中学校の良さ、小学校の良さを守るためにも、変えるところを変えていかないと社会から取り残されちゃいますよね。誰が国鉄が潰れると思っていたか、私の親や祖父、祖母の時代は。でも学校教育は、本当に教員だって民営化しちゃうかもしれないじゃないですかと考えた時に、やっぱり変えるところは変えていかなきゃいけませんよね、と思うんです。ある方が、「学校を変えるには学校を燃やさないといけないよね。それぐらいの勢いでやないと変わらないよね」って、学校焼却論っていうのを言った人がいるんですけども、これはオーバーな話で、それぐらい学校の改革って難しいということだと思うんです。

最後に私のいた伊藤学園のシンボルマークです、校章じゃなくて。これは美術の先生がこういうのをやってくれて、これいいねと。何がいかって言ったら、1つで見ると、人と人が組んで一緒になっているようにも見えるし、イチョウをシンボルツリーにしたんです。こっちが見える。要するに1+1は2じゃない。小学校+中学校は2じゃなくて、2+アルファなんです。このプラスアルファは結構魅力的ですよと、工夫次第によっては。そんなような、私が経験した一例であります。ただ私の言っていることは、8勝7敗ということでお聞きいただければありがたいと思います。以上、御清聴ありがとうございました。

【加藤市長】 小林先生、本当に分かりやすい御講演をありがとうございました。さまざまな部分を具体的にお示しいただいたので、大変分かりやすく、興味深いと思いました。特に印象に残ったのは、初めに子どもありきというお言葉でございましたけれども、それとともに既存の制度、概念を壊して、発想の転換が大事だなということが強く印象に残っております。そし

て御自分の経験というか、8勝7敗というふうにおっしゃっていましたが、さまざまなチャレンジの中で、こうやって仕事を成し遂げていただいたということに重厚感がございました。ありがとうございました。

そこで、これからは小林教授の御講演を踏まえまして、教育委員の皆さま方から御意見をいただきたいと存じます。これからは意見交換とさせていただきたいと存じますので、よろしくお願いいたします。時間が限られておりますので、すみませんが指名させていただきますけれども、まずは坂本先生、ちょっとお言葉お願いいたします。

【坂本委員】 小林先生、どうもありがとうございました。小中一貫校の立ち上げから関わったということで、大変御苦労されたと思います。当時の御苦労というのは、今少しだけ伺ったのですが、その頃から比べて、今は随分いろんな制度が変わってきて、例えば小学校の高学年での教科担任制の導入であるとか、新しい取組が始まろうとしているところなのですが。先生がやってこられた小中一貫教育の中で、施設一体型じゃなければできないことと、今言っただけに高学年の教科担任制みたいな連携型でも十分できることっていうふうに分けるとすると、どこか線引きするところがありますか。

【小林教授】 厳密に、子どもたちが一緒に活動するものというのは、安全性も配慮しなければなりませんので、一緒にいるほうが事前指導、事後指導も含めていいかと思います。ただ、その内容によって線引きというのは、なかなか難しいと思います。ですから私はそれを考える場合には、子どもの安全性というものを考えた時に、ここまではやっていいよねと、ここはちょっと一体型でないと厳しいよねって、そこら辺が大きな判断じゃないかなというふうには個人的には思っていました。私の場合は一体型なので、思い切ったことはやれたっていうことはあります。

【加藤市長】 坂本先生、まだどうぞ。

【坂本委員】 聞きたいことは山ほどありますが、時間の関係もあるのでもう1つだけ。小中一体にする時のメリットの中で、やっぱり中1ギャップの問題が大きかったと思いますが、その中1ギャップに対しては、結果としてはどんな感じだったのでしょうか。

【小林教授】 これは、私自身は無責任にも2年間、トータルで3年間しかいなかったのですが、ただその後、品川区ではいろいろ検証してまとめていますけれども、正直なところ劇的な改善ではありませんが、改善傾向というのは見られたという報告書は出ています。ですから、その課題に関しては全体的に低減している。それが正直なところですよ。

【加藤市長】 よろしいですか。それでは、同じ教師をされておられました新藤先生、お願いいたします。

【新藤委員】 先生、ありがとうございました。先生の講演を聴かせていただきまして改めて、子どものためにということは、本当に今後私たちブレてはならないと、考えていく時に、それを改めて認識させていただきました。意見でもよろしいでしょうか。

【加藤市長】 はい、どうぞ。

【新藤委員】 福生もこれを1つの方策として考えていこうかという、1つの流れの中で、今の段階で小中一貫校というものへの流れについてなんです、そのことの良し悪しは先生がよくやってくさいましたので、よく理解できました。ただそれを今の福生に引き寄せて見た時に、やはり大きな不安があるなというふうに、4点から思いました。

1つは、中1ギャップって、小中一貫ということはいわれてきたのですが、確かに中1で多いというのは出ましたよね。でもこれは国立教育政策研究所のほうで、中1ギャップというものの定義というのはないんだと、これはまだできてないと。必ずしも多くなっている現象が、そこへのギャップであるかどうかということについても、全く科学的な根拠はないんだという、これは正式な見解として出ております。もちろん先生は御存じだと思います。そういうことを踏まえた時に、まず要になるものに中1ギャップということ、不用意に福生に置いていいのかという1つ疑問があります。

2つ目には、現象として出てくるのに、最高学年が9年生になりますよね。そうすると福生の子どもたちの課題として、体験がものすごく少ない。いい体験が本当に極端に少ないという大きな課題があります。そして6年生の最高学年の誇りであるとか、達成感であるとか、そういったものを持ってリセットして中学へ来るということを準備してあげることが、学校教育の中で大きな意味があるだろうというふうには思っております。より体験を多くしていくと。それから中学校が変わっていくことで数学が変わって、世界が広がっていくとか、未知の人間と出会って世界が広がっていくとかというような、いわば体験をどううまく準備していくかということが、むしろ一貫のギャップそのものに目をやるより、福生の場合には考え方としては重要なのかなと、今の段階では課題に対して思っております。

それから3点目には、先生のお話だし、品川なんかを見て、私は見ているだけで中に入っているわけじゃないんですが、やはり考え方として、中学校の前倒しと言っちゃ何ですが、いわば助走っていうんですか。すなわち5年、6年で、中学校のやり方がある意味取り入れていって、そしてギャップを少なくしていこうというのは、先生のお話の中にもあって。品川では早修というのをやりましたよね、6年生までの漢字を全部5年生までに覚えちゃうとか。福生の状況を考えると、今の学力と家庭の支える力なんかの中で、やはり大きな下位層の課題を抱えています。そうすると、小学校にこういったことを助走として前倒しにしていくことが、福生の現状の中では子どもたちにとって大きな負荷になって、より大きな次の問題を生んでいくのかなと。それでちょっと不安を感じましたのは、学校訪問を小学校がした時に、先生方が中学校の授業を見学しましたと。そうしたら板書の速さに驚きましたと。あの速さについていくには、今の小学校じゃ駄目ですというふうにおっしゃったんです。中学校は子どもに則して改めていけばいいわけですから、その前倒しっていう考え方が、知らず知らずのうちに入っちゃっ

ているんだなど。その考え方が、やはり前倒しではなくて、それぞれの中の連続性で次の発達を準備していくんだという辺りが、しっかりと学校現場あるいは私たち教育委員会と、現状把握と共通認識、価値の共有化というものは、もうちょっと丁寧にやっていかざるを得ないのかなと思います。

4点目には、品川の場合には自由選択制ですので、親の意思であったとしても、入る時に選択していますよね。でも福生の場合は小規模ですから、選択制はできないというふうに考えていくと、決められた中で9年間いると、小さいなりに非常に閉鎖性が出てきたり、慣れによる見過ごしみたいなのは今でもある中、出てくる可能性は高い。またそうした時に、これに対する対応をしっかりと準備していくことをやっていかないと、子どもが守られていかない。例えば品川の場合でも50%は7年生の時に出ていますよね。どこの学校も大体40%、50%は7年生、つまり福生で言えば中1の学年になった時に学校の外へ出て行く。もちろん私立、公立へ行く人数が多いんでしょうが、その辺の状況だと。ただ自由選択制で中学で入ってくる子どもも含めると、大体どこの学校も約半数が入れ替わる。私が見た限り、八潮学園を除いては大体入れ替わってしまう。50%入れ替わる中では、9年制の連続というのがどう保てていけるのかなということも含めまして、福生の場合はそれが選択できないわけですから、そういったことも含めると、やはりまだまだ考えていかなきゃならないことは多いのかなと思っています。

統一って言っても状況によって、今全国バラバラですよ、いろんな形としては、成果も。しっかりした比較ということをやっていないわけですから、果たしてこの成果が中高一貫だからできたのかどうかということも含めて、まだまだ考える。なぜならば、福生は50年代からの荒れた現場の経験の中で、先生がおっしゃったのをやっていくというのは、基本的にはほぼやっているんです。すなわち小学校とのこういう。これは体験学習で小学校に教えに行ったりもしていますし、総合学習の中での取組で小学校へ行って教えているという場面もあったり、カリキュラムの工夫、研修でも市教研を通じて始めていたり、先生がおっしゃったことは、現場の苦しみの中から福生は積み上げてきているので。その方向性と先生がおっしゃった成果とは、今日非常に一致したので、福生は間違っていないんだということを改めて認識はさせていただきました。

ただ、やはりこれだけのことを固めてきた福生がやっていく方向性として、もう少し実態とかみ合わせた形で共通理解とかが必要かなと。改めて先生の講演を聴きまして、方向性は間違いないけど、方策として、福生の抱える子どもたちの課題にこれが生きるのかどうかというようなことを含めまして、もう1回考えるチャンスをいただきました。本当にありがとうございました。

【加藤市長】 新藤先生、ちょっと私の理解が少ないのかもしれないんですけども、2番目に言われた体験が少ないというのは、具体的にほかと比べてどういうふうなところがあるんですか。

【新藤委員】 例えば小さい幼児期からずっと、家庭でどこかへ連れて行ってもらうとか、何かに出会うとか。だからちょっと都内というか、立川辺りへ行っても、子どもたちはグッと固

まっちゃうという。まして都内へ連れていったら、全然別世界へ来たみたいになる、部活の子なんかを連れて行くと。そういう中で、品川の子どもたちと違う成育歴を持っているという。そこはやっぱり学校が考えて準備していくところだというふうに。

【加藤市長】 分かりました。新藤先生は、現場の教育の中で大変苦勞した時代の校長先生だったものですから、私もそれを間近で見させていただいて、それが政治を志した私の一番最初のきっかけだったんですけれども。今の新藤先生の御意見を聞いて、小林先生どう思われますか。

【小林教授】 体験についてはそれぞれの実態がありますので、私も分かっていませんので、あまり責任のあるお話はできませんが。だからと言って、こうしようというよりも、市としてまたは各学校として、それぞれ小学校、中学校の体験を積み上げていく。そして連携をして、または一貫にしてやれば、さらに中身は濃くなりますよという、そういうような視点がいいと思うんです。ですから、確かに不足していたらそれを補っていく。場合によっては、この学校だったら低学年で頑張っやるとか、そんなような感じでということだと思っんです。ですから、どの場所で行っていくか。今新藤先生が言われたことは非常に重要なことだと思っんですので、体験から学ぶというのはいじめの防止にもつながりますし、非常に大事だと思っんです。

【加藤市長】 ありがとうございます。それでは加藤委員、お願いします。

【加藤委員】 今日はやさしく分かりやすいお話をいただきまして、ありがとうございます。このところ、令和における福生市立学校の在り方検討委員会を傍聴させていただいたりして、私なりにいろいろ小中一貫教育や一貫校について、考えさせてはいただいていたんですが、なかなか何がいいっていうまでは行かなかったんですが、先生のお話で子どもたちのためにというのが、すごく強く先生のお気持ちが伝わってきました。やはり福生市においても、子どもたちのためにということを経一義に考えて、大人たちの都合とかそういうことは、その次に考えるべきで。いろいろ福生で問題抱えている子どもたちが、学校に前向きに行けるような体制を作ってあげることが大事なのかなということを経、先生のお話を伺って思っを新たにさせていただきました。

1つ気になっていることなんですが、学校に行けなくなった子たち、さっきの新藤先生のお話とも関わるんですが、中1ギャップの話も伺いましたが、9年間という長いスパンになりますと、小学校終わって、新しい世界、中学に行って、これでもう1回リセットできるんじゃないかと考える子もいるんじゃないかなとか、そういうことも考えたんですが、その辺はいかがでしょうか。

【小林教授】 まさにそのとおりで、リセットして次のステージで頑張る、これが従来の方です。そういうことによって生かされる子どもたちもいますし、その段差になかなか適応できないという子もいるし。それはまさに、全てどっちって決めつけられませんで。しかし9

年間で一貫だと、1つだよって強調しながらも、低学年というのはきわめて小学校的な扱いをしますので、その中でもちょっと独立した雰囲気があるんです。そういう点で、9年生が卒業する時に代表者を呼んでお別れをやっているんですけども、ああいうところに段差をうまく設けながらやっている。制服も少し変わっていくとか、そういういろんな工夫です。今までは小と中という別々のステージでやっていたんですが、1つの場所の中で幾つかのステージを作ってあげるといふ、そういうような新しい学校のコミュニティをそこに作り上げていくという発想でやってまいりました。

【加藤委員】 ありがとうございます。

【加藤市長】 それでは野口委員、お願いします。

【野口委員】 小林先生、今日はありがとうございました。普段私は幼児教育に携わっているんですけども、福生市はここ数年来、幼保小の連携ということで非常に力を入れてきています。実際には幼保の管轄は公立の小中とは違うんですけども、その中で垣根を超えた交流、幼保の保育を小学校の先生に見てもらい、あるいは幼保の先生が小学校に行って授業を見せてもらい、そういう連携も非常に積極的に行っていて、とても良い効果が出てきていると私自身は肌で感じているところです。

それ以前にも、中学生が職場体験で幼稚園に来ることもあるので、交流自体はもともとあったんですけども、どうしても管轄の違いから、「お客様」という感じになってしまうんです。今の小中一貫教育のお話を聞いた時に「今度の中学生と小学生の交流なんです」といった話し合いが、同じ職員室で、小中の先生が膝つき合わせて、侃々諤々話し合うイメージが浮かんだんです。

今日のお話はもちろん小中の連携が中心になっているんですが、せっかく福生市の場合は幼保小の連携が進んでいるので、小林先生に質問したいのは、将来的に、小中の連携の先に幼保も加えることの重要性、あるいは理想的な形について、もし先生なりのビジョンがあったらお聞かせいただければと思うんですけども。

【小林教授】 私もそこら辺は本格的に実践したりとかっていうわけではないんですが、私も今までの職歴の中で、保幼小の連携はすごく関わってきました。私は「保幼小中までだよ」といふ言い方を一貫して言ってきたんですが、いろいろやっていると、平成10年に学校教育法が改正されて中等教育学校、中高一貫校ができたんです。これはどっちかと言うと、受験する型の1つの教育システムというか、要するに中学校のところで受験を済ませないで、のびのびと6年間やって大学受験に向かわせましょうと。ということは、どちらかと言うと知力的なものです。知徳体で言うとなら知です。義務教育で小中のまとまりというのは、中高よりも深いと思うんです。それは知徳体全てがあると思うんです。そうすると今度は、幼保と小との連携というのは正直言うと、小中に比べるとメニュー的にちょっと違ってくると思うんです。ただそれをわきまえてやれば、連携という点ではすごく効果があるし、小学校籍の先生、また全体の先

生にもいい刺激になると思うので、それは今言われたとおりに積極的にやりになると効果的にはかなり高いと思いますが、同じように一体的にやるというのは、現実問題としてなかなか難しいかもしれないです。というのが私の今の考えです。

【野口委員】 ありがとうございます。今日のお話を聴いて、やはり良い取り組みだと確信すると同時に、ひとつひとつの課題をじっくり考えながら、幼保小中一貫教育の「福生スタイル」ができるの良いと感じました。ありがとうございます。

【加藤市長】 よろしいですか。まだまだ言い残したこともあるという人は。よろしいですか。それでは小林先生ありがとうございました。教育委員の先生方もありがとうございました。意見交換はここまでとしたいと思います。

続きまして次第の5、総括に移ります。石田教育長から本日の会議について総括をお願いいたします。

【教育長】 小林先生ありがとうございました。伊藤学園については、私が指導主事だった頃から着目をしておりました小中一貫教育校について、久しぶりに小林先生のお話を伺って、改めて伊藤学園の姿勢に学ぶことが多いなと感じました。特に今日の講義で、「初めに子どもありき」という、この教育哲学を再度確認することができました。これは教育行政を企画する上でとても大事な観点であるわけです。あるいは既存の制度等に囚われて新たな教育を志向できない「観念の罫からの脱却」という言葉も非常に印象に残りました。こういった視点と併せて、私たち福生市教育委員会は、全てはふっさっ子の未来のために、これからの時代に求められる学校の在り方を、改めて検討、追究していくという覚悟を新たにすることができました。本日は本当にありがとうございました。

【加藤市長】 ありがとうございました。それでは私からも最後にお話をさせていただきます。まず、改めてお話をさせていただきますけれども、小林先生、今日は貴重な御意見ありがとうございました。そして教育委員の皆さん方からも、それぞれのお立場でいろんな御意見をいただきまして本当にありがとうございました。

思い起こしますと、先ほど新藤先生のお話を聴いていて、本当に大変な時代があって、そして先生方もさまざまな経験を重ねて、ここまで福生市の教育も発展してきたかなというふうな思いですけども、小林先生のお話を聴いていて、まだまださまざまな部分で意識の改革というんでしょうか、そういうことも、子どもたちのために環境を良くすることができるんじゃないかなという思いを改めてさせていただきました。ありがとうございました。

おかげさまで、皆さま方の御努力で令和3年度は、「共働き子育てしやすい街」、またランキングに入りました。先ほど野口委員からのお話もございましたけど、幼保小、そして中学、そこまでしっかりと子どもたちの、このコンパクトなまちでの教育環境を良くしていくということも、改めて考えさせていただきました。

こうやって私が招集した総合教育会議によって、先ほどもお話しさせていただきましたが、

一番最初に政治に入るきっかけを作った教育に関しても、いろんな要望を出すことが今できております。例えば英語教育を小学校1年からやってくれとか、それから中学校の給食をやりましょうとか、またコミュニティ・スクールを全校でやりましょうとか、さまざまなことをやらせていただいたのも、教育委員会の皆さん方が、非常に強く行動していただいたということがありがたく思っております。

ただ、先ほどもお話ししましたように、学校の施設が老朽化しておりますし、それから少子化の中で、外国人も60か国が住んでおって7%近くの比率を持っている、すごい国際都市でございますので、そういう中で、その子たちも残さずしっかりと福生の子どもたちとして、教育を重ねていってもらわなきゃいけないということを思っております。今後ともぜひ関係部署の御努力、市長部局としてはできる限りのことをやらせていただこうと思っておりますので、今後ともよろしく願いいたします。小林先生、今日はどうもありがとうございました。

【教育総務長】 加藤市長ありがとうございました。これを持ちまして、令和4年度総合教育会議を終了とさせていただきます。本日は誠にありがとうございました。

午後3時8分終了